

## 相良守次先生を偲ぶ

相良先生はいわば大学生生活の最後とでも言うべき7年間を私ども文教大学人間科学部で過ごされた。

人間科学部の設立にあたって、先生をお招きしたいとご相談したのが、昭和50年のこと、先生は人間科学としての心理学に心から興味をもたれ、快諾された。そしてほとんど若い者ばかりで構成した人間科学部に、52年から教鞭をとられたのであった。

当時まだ大部屋で、数人の教員が雑居していた中、机を並べられ、その中でゆっくりとパイプをふかされながら、若い教員や学生たちと歓談されていた先生のお姿が、まだ昨日のこのように想いおこされる。

100人を越える大教室での心理学概論の講義から、専門科目や卒論にいたるまで担当された日々であった。御自宅から越谷まで、片道3時間近くもかかる中を、毎週通われ、教授会にも必ず出席され、人試の採点などにも進んで参加して下さいったという、私どもにとっては、なんともおそれ多い7年間であった。

プライベートな点でも、あるいは夜まで私どもと食事をともにされ、さらに若い教員のところに生まれた子どもの名付け親になられるなど数々の思い出がある。

最後の2年程は、研究室の若い者に往年の心理学会をめぐる貴重なお話をお聞かせいただき、それを「木曜会の頃」「戦中・戦後の日本心理学会とその周辺」および、「第20回国際心理学会議のこと」の3編にまとめて人間科学研究に掲載された。これが先生の最後の玉稿になったのではないだろうか。

終始、おだやかに若手を見守り、教授会でまとめの発言をされ、それでいて目立つことのない先生のお姿に親しく接し、「あんな風に年がとれたらなあ」と誰もが思ったものであった。

昭和58年に退職されてからも、非常勤でつづけられることになったが、さすがにおからだに限界だったのであろう。その年の秋以降、すこしづつ衰えていかれた先生を、私どももどうすることもできなかった。

先生を最後まで酷使してしまったのではないかという気持ちもある。ただおそらく、先生が文教大学人間科学部の生活を喜んでおられたということが私どものせめてもの救いである。

本当にありがとうございました。

心から感謝しつつ。

昭和61年11月24日

人間科学部長 水島 恵 一  
人間科学部心理学専修一同

## 御 略 歴



昭和57年12月17日心理学専修研究会  
での相良守次教授（箱根対岳荘）

明治36年	5月	8日	山形県鶴岡市 生
大正14年	3月		水戸高等学校理科甲類卒業
昭和4年	3月		東京帝国大学文学部心理学科卒業
	4年	3月	同 副手
	5年	4月	成城高等学校 講師
	11年	4月	同 教授
	18年	9月	東京帝国大学 助教授
	27年	4月	東京大学 教授
	27年	5月	文学博士
	29年	4月	東京大学文学部心理学研究室 主任
	29年	11月	学術用語分科審議会専門委員
	39年	4月	東京大学 定年退職
	39年	4月	東京女子大学 教授
	39年	5月	東京大学 名誉教授
	44年	1月	日本学術会議会員
	44年	4月	早稲田大学文学部 客員教授
	44年	4月	相模工業大学 教授
	46年	1月	第20回国際心理学会議 組織委員長
	49年	4月	勲三等旭日中綬章受章
	52年	4月	相模工業大学 名誉教授
	52年	4月	文教大学人間科学部 教授
	58年	3月	同 退職
	59年	7月	発達科学研究教育センター理事長

61年11月 7日 午後3時38分 心不全のため御逝去

この間昭和36年～40年 日本心理学会 理事長

42年～48年 同 上

東京都立大学大学院（31～44年）、学習院大学（35～47年）等  
で非常勤講師を兼ねる。

# 主要研究業績一覧

## 1. 著 書

「日本詩歌のリズム」	教育研究会	昭和 6年
「行動と生活環境」	弘文堂書房	昭和 17年
「学び方の科学」	羽田書店	昭和 17年
「記憶とは何か」	岩波書店	昭和 25年
「心理学」	朝日新聞社	昭和 26年
「行動の理解」	牧書店	昭和 26年
「心理学の話」	宝文館	昭和 28年
「芸術形象の心理」	牧書店	昭和 28年
「現代心理学ノート」	河出書房	昭和 30年
「図解心理学」	光文社	昭和 35年
「心理学概論」	岩波書店	昭和 43年
「欲求の心理」	岩波書店	昭和 48年

## 2. 訳 書

W. ケーラー 「心理学における力学説」	岩波書店	昭和 26年
K. レヴィーン 「パーソナリティの力学説」(共訳)	岩波書店	昭和 32年

## 3. 論 文

リズムの自然テンポと自然休止についての実験	心理学研究 V	昭和 5年
短歌の形式に就いて	心理学論文集 III	昭和 6年
リズムに関する一実験	心理学論文集 IV	昭和 8年
記憶における遡及抑制	第 V 回日本心理学会大会報告	昭和 10年
再生よりみたる過程・痕跡の同質性、異質性の問題	心理学研究 X I	昭和 11年
記憶における同化過程	第 VI 回日本心理学会大会報告	昭和 13年

記憶における抑制要因としての同化機制、全・統報

心理学研究XIV

昭和14年

- M. Sagara, & T. Oyama. Experimental studies on figural after-effect. Psychol. Bull., 1957, 54, 327-338
- M. Sagara, K. Yamamoto, H. Nishimura, & H. Akuto. A study on the semantic structure of Japanese language by the semantic differential method. Jap. Psychol. Res., 1961, 3, 146-156
- M. Sagara, S. Torii, & H. Katori. The influence of subliminal stimuli upon judgement of distance. Jap. Psychol. Res., 1962, 4, 58-64
- M. Sagara, A. Tago, & Y. Shibuya. The influence of subliminal stimuli upon the impression of a line drawing of a face. Jap. Psychol. Res., 1962, 4, 174-178

#### 4. 編 著

心理学辞典	弘文堂	昭和28年
心理学講座(共編)	中山書店	昭和28年
現代心理学(共編)	河出書房	昭和30年
芸術心理学講座(共編)	中山書店	昭和32年
心理学事典(共編)	平凡社	昭和32年
講座現代心理学(共編)	中山書店	昭和33年
心理学入門講座(共編)	大日本図書	昭和36年
経営心理学講座(共編)	ダイヤモンド社	昭和38年
現代心理学の諸学説	岩波書店	昭和39年
新版・心理学入門講座(共編)	大日本図書	昭和44年
新版・心理学事典(共編)	平凡社	昭和56年
学術用語集 心理学編(共編)	丸善	昭和61年